The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	戦後日本型物流の構築 ： トラック輸送を中心として
Author(s)	関谷, 次博
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/45782
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【2】

氏　　名	関　谷　次　博（せき　や　つぎ　ひろ）
博士の専攻分野の名称	博　士（経済学）
学　位　記　番　号	第　１８９０３　号
学位授与年月日	平成 16 年４月 15 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 経済学研究科日本経済・経営専攻
学　位　論　文　名	**戦後日本型物流の構築－トラック輸送を中心として－**
論文審査委員	（主査） 教　授　宮本　又郎 （副査） 教　授　阿部　武司　　教　授　澤井　　実

論文内容の要旨

本論文は、現代日本の主要貨物輸送手段であるトラック輸送体系の確立過程を歴史的に解明し、それが日本の物流の変化とどのように関係していたかを検討しようとするものである。論文は課題と分析方法を述べた序章とそれに続く５章と、結論を述べた終章からなり、対象とする時代は、日本で本格的にトラックが利用されるようになり始めた大正・昭和初期から現在に及んでいる。

第１章では、鉄道の貨物輸送機能をトラック貨物輸送のそれとの対比において検討している。一般に鉄道の登場は、迅速性、低運賃、安全確実性といった貨物輸送上の革命をもたらしたとされているが、こうした鉄道の利便性は、鉄道の駅間輸送に限られるもので、駅を中心とする貨物の集荷・配達においては隘路が残っていた。そうした鉄道貨物輸送の欠点をついたのがトラック輸送であった。それはトラック輸送が鉄道駅で集荷・配達を行って幹線鉄道輸送と補完的関係になったことにとどまらなかった。戦後のトラック輸送の発展において、輸送トンキロの量的な拡大よりも、トラック輸送の長距離化が進展したという現象に示されているように、トラックは鉄道と匹敵し、後者を代替する幹線輸送手段となり、日本の物流を担う新しい輸送体系を構築するようになったのである。

以上に指摘したとおり鉄道輸送においては鉄道駅における貨物の集荷・配達業務が輸送の効率性に大きな影響を与える。第２章では、戦前においてこの業務を担っていた小運送の実態を大正・昭和初期の大阪市を事例に考察し、鉄道省による業者の合同など組織的な改善が試みられたものの、現実には大幅な改善は加えられず、そのため、鉄道輸送の利便性に制約が課され、小運送問題は戦後にも引き継がれることになったことが明らかにされている。

第３章では、トラック輸送の外的条件に目を転じ、戦後急速に進んだ道路整備の実態と、それがいかほどトラック輸送の発達に寄与したかを考察している。そして、戦後急速に自動車道路の整備が行われ、高速道路の整備が行われたことは事実であるが、道路整備の進展はモータリゼーションを加速化し、都市を中心とする交通渋滞をもたらすという側面があったように、自動的にトラック輸送の発達を生み出したわけではないと指摘している。著者によれば、むしろ、戦後における輸送事情は、インフラストラクチュアの整備といったハード面では、鉄道にせよ、トラックにせよ、決して良好ではなかったのであり、そうした状況の中でトラック輸送が発展したのは、トラック運輸業者たちの主体的努力によるところ大きかったのである。

第４章と第５章は前章を受けて、トラック貨物輸送の発展をもたらしたトラック運輸業者の企業者活動を具体的に検討しようとしたものである。

第４章では、鉄道貨物輸送の輸送時間をめぐって荷主の不満が高まるなかで、これを解消するため、輸送の迅速化を実現しようとしたトラック運輸業者の活動が明らかにされている。これらの運輸業者のなかには、従来、鉄道とは協調的な関係にあった通運業者（戦前の小運送業者）も含まれていたが、彼らの行動は結果として、鉄道との関係における協調関係から競争関係へという変化や、通運業者主導による荷主の「国鉄離れ」という現象をもたらしたのである。

第５章では、長距離路線トラック貨物輸送事業の発展においてパイオニア的役割を演じた西濃運輸を事例に取り上げ、トラック輸送事業における革新の遂行プロセスを考察した。西濃運輸創業者田口利八の「長距離輸送構想」、ならびに「西濃運輸方式」という先駆的かつユニークな発想がどのように現実化され、荷主ニーズと調和するものであったかを明らかにしている。

以上の諸章での考察を踏まえ、終章では次のように結んでいる。戦後トラック輸送の発達はこれまで道路整備の進展とともに説明されることが多かった。しかしながら、そうしたインフラストラクチュアの整備や自動車工業の発展が、自然史的にトラック輸送の発展を生み出したわけではない。ドア・ツー・ドアの輸送など、貨物輸送の迅速化、効率化、低コスト化、円滑化を望む戦後日本の物流界の要請と、トラック運輸業者との主体的な企業者活動が結合してそれは初めて実現したのであった。鉄道からトラックへの主要貨物輸送手段のシフトは戦後日本の物流の変化を内包するものだったといえる。

論文審査の結果の要旨

トラック貨物輸送が著しく発達したのは国際比較上、戦後日本の物流の大きな特徴であるが、本論文は、これが現代日本の貨物主要輸送手段として確立されるまでの歴史的過程を解明しようとしたものである。本論文の貢献は、トラック輸送が現代物流の主役に躍り出たプロセスを、鉄道輸送体系との交替という論点を中心に据えて、長い歴史時間軸のなかで考察したこと、道路整備の進展や車輌性能の向上などのハード的側面からのみならず、変化する荷主のニーズや輸送手段選好、それに応えるトラック運輸業者の企業者活動、鉄道とトラックとの競争という側面から掘り下げて分析したことにある。内航海運との関係など輸送ネットワーク全体のなかでのトラック輸送の位置づけ、規制行政との関係如何など残された問題はあるが、全体として、トラック輸送と物流の関係を経済史・経営史の視点からアプローチしたという点で重要な知見があり、博士（経済学）の学位に十分値するものと判断される。